被災地で復興支援に取り組むNPO等の活動を紹介します。

Revival spirit 復興スピリット 第3回

根岬梯子虎舞（ねさきはしごとらまい）組
代表 菅野 修一さん（陸前高田市）

▲地域総出で準備をする

虎舞が、地域の人間性を高める

▲高いはしごの上で舞う

全戸参加の伝統行事

長さ20メートルの梯子をかついで海に浸ける。そこから祭が始まる。陸前高田市根崎地区は、半農半漁の約百世帯の小さな地区。祭が近くなると、地域に笛や太鼓の音が響き、子どもからお年寄りまで地域総出で準備をする。祭が終わると、次の祭に向けて地域がまた一体になる。根崎地区は4年に1度の虎舞を「絆」にして、昔から人々がまとまってきた歴史がある。「それを子どものときから見ているから、地域には気持ちのいい子どもたちばかりです。祭は人をつくるんだとつくづく思います。」と菅野さん。

地域のヒーロー

20代で始めてもう30年以上虎舞を続けているという菅野さん。「高い梯子の上で、虎の衣装を着けて舞うんですが、バランスを取るのが大変なんです。梯子の揺れ、風の向きを、身体が自然に読んでいるのかもしれません。」と振り返る。地域の子どもたちは、物心ついたころから、家の梯子の上で逆さになって遊んでいる。菅野さんの孫たちも「大きくなったら虎舞梯子に乗る。」と、風呂敷をかぶって階段を上がっているという。「虎舞は地域のヒーロー、あこがれになっているんです。」

虎舞が津波から救った

「地域での決め事が揉めずに決まっていくのは、虎舞があるからなんです。」菅野さんは断言する。「神様が、地域のまとめ役を虎舞に任せたように感じます。」神妙な面持ちで続ける。「昭和の津波で、この地区は被災しました。それで、みんな一緒に高台に移り住んだんですが、それがスムーズにできたのは、地域が虎舞を中心にしてまとまっていたからだと思います。今回の大津波では、奇跡的にほとんど被害が出ませんでした。虎舞があったおかげで助かったんだと思います。虎舞のチカラって、凄いと思います。」

地域がまとまるかなめ

20代から70代の人が、虎舞に対等に関わる。それが地域の人のつながりを強くしている。そのチカラが震災でも発揮された。「震災から2週間くらいは大変でした。井戸が止まったり、食料が尽きたりと。でも、一声かけると、虎舞の集会所を頼りにみんな集まって来て、役割分担しあうんです。井戸の水が出ないとなると助け合い、食料がないとなると皆で買出しに走り、集会所に持ってきては、皆で平等に分けるんです。」人のつながりが心強いと菅野さんは言う。

練習場が宿泊場所に

震災のとき、全国からボランティアの人がやって来て、地域を支援してくれた。水道も凍るような寒さの中、畑でテントを張って生活しているボランティアの人たちに、虎舞の練習場の2階に泊まってもらい、地域の家のお風呂にも入ってもらった。「自分にできることは率先してやるという意識がこの地域にはあります。ガレキの片付けも、子どもが自分から手伝っています。自然に手伝う、そういう気風になっているんです。」菅野さんは胸を張る。

神様が与えた宝物

地域で何か不都合があれば、長老やトップの指図がなくてもうまく役割分担ができて助け合える、そういう仕組みになっている。それは虎舞があるおかげだと菅野さんは確信している。「『この地域には虎舞が必要だ。』という神様の考えで、300年も前から虎舞が始まったように感じます。虎舞に関わることで、いろいろな人とのつながりが生まれました。虎舞は、私にとって神様が与えてくれた宝物です。」

復興祈願祭に虎舞が

昨年10月に、陸前高田市の黒崎神社で復興祈願祭が行われた。黒崎神社のある広田町は約600世帯が被災し、祭道具も流された。震災の影響などもあり、当初は神事だけが行なわれる予定であったが、菅野さんの虎舞組が中心になって祭を成功させた。「虎舞を見に来てくれた人の目つきが違いました。前を見て進むという決意が感じられました。会話と笑顔があったのがうれしかったです。」菅野さんは目を細める。「震災から半年で、祭ができました。私も祭を開催すべきかどうか迷いましたが、自分たちも頑張るんだということを今見せてやらなくては駄目だと思いました。」

若い後継者が現れる

少子化の中で虎舞の伝統をどうやって守っていくか、これからの課題も多い。しかし、明るい話題も生まれた。震災後に、若者が三人も菅野さんのところにやって来て、「虎舞をやりたい、教えてください。」と言ってきたという。「びっくりしました。梯子に登れない子どもでも、笛や太鼓をやりたいと言ってきているんです。私たちがやり続けている後姿を見て、入ってくれたんだと思います。世代が違う人が同じ目線で笑って楽しんでいく。それが大事なんですね。」菅野さんの表情は明るい。

▲お風呂・買い物タクシー

▲いわせんスタッフ

地域協働の息吹き 第3回

「お風呂・買い物タクシー」で地域が元気に

NPO法人いわて地域づくり支援センター 常務理事 若菜 千穂 さん

地域の新たなつながり

寒さの厳しい田野畑村で、「お風呂・買い物タクシー」が運行されている。これは、県の「新しい公共支援事業」を活用し、NPOと村が協働で実施している事業だ。震災で集落が離れ離れになったため、入浴や買い物を通じて地域の新たな交流の場を作り、生活の質の確保や高齢者の引きこもり防止を行うことなどが狙いである。岩泉町の入浴施設で入浴した後に、帰りには村内の商店などに立ち寄って、利用者の買い物のサポートも行う。地域を結ぶこのタクシー事業は、地域の人の孤立化防止の新しい試みとして注目されている。

村とNPOの協働事業

田野畑村では、すでに高齢者の通院をサポートするデマンド型交通を運行している。NPO法人いわて地域づくり支援センターは、これらの公共交通の広報や効果調査に関わってきた。こうした縁や取り組みの中から、同法人と村が協働で実施するタクシー事業のアイデアが出された。保健師や地域の老人ホーム、地元のタクシー会社や元ヘルパーなど、様々な人や機関の協力も得ながら取り組まれている。

外出機会の創出

今回の大震災で、田野畑村も大きな被害にあった。仮設住宅で暮らしている人や、浸水した元の集落で暮らしている世帯も多い。「カーテンを開けるとめちゃめちゃになった町が見えるから、なるべく外出を控えるようになった。」「波の音も昔より大きく聞こえる。」と心理的に大変な思いをしている人がいる。「それを知って、被災した集落の方と仮設住宅に住んでいる方が一緒にバスで出かけられるように、曜日も合わせて設定しました。」と若菜千穂さんは事業実施の経緯を語る。

少しずつ明るい笑顔が

入浴前は血圧測定など健康チェックをし、入浴後にはみんなで軽い運動をしたり民謡を歌ったりして楽しむ。「体が軽くなる。」「元気になっていく。」と参加者からは好評だ。「震災直後は、落胆のあまり口数も少なくなってしまう人もいましたが、みなさんの顔が少しずつ明るくなっているのがうれしいです。」若菜さんは活動の成果を確かめる。

行政とも密な連携を

公益性を帯びている地域づくりの事業は、行政とうまく連携して進めていくことが成功のカギになるという。この事業でも、行政とNPOが役割分担と連携を常に意識している。「定期的に関係者で打ち合わせをしています。利用者の状況や留意しなければならない事項などについても、細かく情報共有したり検討したりしています。」若菜さんは事業成功の秘訣を語る。

●根岬梯子虎舞組
〒029-2208
岩手県陸前高田市広田町字根岬地内
代表 菅野修一さん
TEL：0192-56-3592
（民宿志田）

［根崎梯子虎舞 ねさきはしごとらまい とは］

陸前高田市広田町根崎地区の伝統芸能。300年以上の歴史があるとされ、市の無形民俗文化財に指定されている。長さ約20mの梯子を約45度傾けた先端部で披露される曲芸的な舞であり、頭（かしら）使いと尾（しり）使いの二人の使い手が曲乗りで舞う。
虎舞の由来は、地元の神様が出雲の国に赴く途中、谷間の崖で一頭の唐獅子に行く手を阻まれたとき、一行の中の才坊という者が、身拍子よろしく唐獅子を岸崖の上へと誘っていったお陰で無事出雲へ到着できたとの伝説に基づいて、この唐獅子と才坊の様子を再現したものと言われている。

●NPO法人いわて地域づくり支援センター
持続的な地域づくりを進めていくための中間支援組織として設立。地域づくりに関する啓発、提言、人材育成等の支援活動を行う。活動は、大きく分けて「地域づくり」と「生活交通確保」の2つ。地域に住んでいる方々が自分たちで地域を点検し、地域の資源を守ったり改善したりする活動に取り組んでいけるよう、後方支援をする活動に取り組む。地域計画の立案、公園・緑地の施設設計などの専門分野の活動も幅広く行っており、現在、田野畑村の公共交通活性化事業や、北上市の地域公共交通計画事業にも携わっている。
〒025-0091
花巻市西大通り1-20-10-102
TEL／FAX：0198-29-5515
メールアドレス：iwasen@w9.dion.ne.jp
ホームページ：
http://iwasen.net/index.html